

埼玉のリトルバード、自社栽培のブルーベリーで加工食品

埼玉

フォローする

2023年6月12日 18:19 [会員限定記事]

保存



リトルバード（埼玉県春日部市）の小嶋孝之社長と同県幸手市のブルーベリー類の農場

総合建設業のリトルバード（埼玉県春日部市）は自社栽培のブルーベリー類を使った加工食品事業を始める。県内でも有数の規模でブルーベリー類の栽培を始めており、年内にジャムやジェラート、ドライフルーツなどを商品化。自社店舗を中心に販売する。埼玉県は最近、おいしいイチゴの産地として注目されているが、新たに県産ブルーベリー類が話題を集めるきっかけにもなりそうだ。

リトルバードは県内の幸手市に約0.2ヘクタール、杉戸町に約1ヘクタール、春日部市に約2ヘクタールの農地を確保。ブルーベリーを中心にラズベリー、ブラックベリー、クランベリーなど計約5000株を栽培している。ブルーベリーだけでも約4000株あり、今年6～8月のシーズンには約5トンの収穫を見込む。

もともと耕作放棄地となっていた農地を活用。農薬を使わず、4ミリ目合いの細かいネットで覆うことで害虫の侵入を防ぐ。また、井戸からの地下水を水やりに使い、ポットに植えた株に肥料の溶液を自動的に供給するなどコスト削減や省力化を進めている。

幸手市の農場近くに置くジャムやジェラートなどの生産拠点にも太陽光や風力による発電設備を導入し、環境配慮やコスト削減につなげる考えだ。

収穫したブルーベリー類はいったんマイナス60度で冷凍庫に保管する。同社は2022年から受粉に役立つ養蜂も始めており、その蜂蜜や自社栽培のレモンも使ってジャムやジェラートなどを生産する。



収穫したブルーベリーはいったんマイナス60度で冷凍保存する（埼玉県幸手市の事業拠点）

商品は幸手市や杉戸町のふるさと納税の返礼品向けに供給するほか、JR大宮駅周辺に確保することを目指す自社販売店や通販サイトなどで発売する計画だ。冷凍庫を置く倉庫や加工食品生産設備などには国の事業再構築補助金も活用する。

小嶋孝之社長は日本工業大学（同県宮代町）卒で、[西松建設](#)に入社。その後、千葉県の医療法人に転職して病院建設や設備メンテナンスなどに携わった後、10年にリトルバードを設立した。

病院建設の経験を生かし、省エネシステムの施工や高気密高断熱住宅の建設などで事業を伸ばしてきた。しかし、建設業は年ごとの受注によって売り上げの増減の幅が大きく、経営を安定化させるため農業分野に注目した。

その中でブルーベリーは米国やチリなどからの輸入が多く、国内の有力産地が東京都や長野県などに限られることから加工食品まで一貫して手掛ける6次産業化に取り組めば付加価値を高められると判断した。

「最初に植えた幸手市で採れたブルーベリーがとてもおいしかった」（小嶋社長）のも事業化の理由という。同社の年商は現在約1億円だが、「3年後にはブルーベリー類の事業を建設業を上回る規模にすることを目指す」（同）という。

スーパーで販売される生のブルーベリーは米国やチリなどからの輸入品も目立つが、農林水産省の特産果樹生産動態等調査（2020年産）によれば、国内でも約2200トンが収穫されている。最大の産地は東京都で収穫量は337トン。これに群馬県が247トン、茨城県が239トンと続き、関東が有力な産地となっている。埼玉県は86トンにとどまる。健康効果があるとされるポリフェノール類のアントシアニンを多く含む特長や首都圏の大市場に供給しやすいメリットなどから今後、埼玉県でもさらに生産量が増える可能性が高そうだ。

[アプリで開く](#)

すべての記事が読み放題
有料会員が初回1カ月無料

[有料会員に登録する](#)

[無料会員に登録する](#)

[ログインする](#)

保存

